
ハロウィン企画「銀の魔女」@妄想部

妄想部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハロウィン企画「銀の魔女」@妄想部

【Zマーク】

Z9763X

【作者名】

妄想部

【あらすじ】

ケーキ屋レイちゃんがハロウィンの日に魔女に仮装して頑張るお話です。

今回は匿名投稿なので、どの妄想部員が書いたものか予想するお楽しみ付き 解答編は明日11月1日18時に投稿予定です。詳しくは活動報告にあります。

ハロウインの日

その日、家に帰った瞬間から面倒なことに巻き込まれるとわかつていた。

母親が、笑顔でレイを手招きしている。

この状況で、良いことなどあつた試しがない。

「レイ、今日は何の日か知ってる?」

そう言われて壁にかかっているカレンダーを見た。
今日は10月31日。

レイの体内時計が正確なら、今日はハロウインだ。

「じらない……」

反射的に知らないふりをしてしまつ。

それも仕方がない。

正直に答えたところで、帰ってくる答えは同じだ。

「ハロウインでした! と云ふことだ、これ。店番よろしくね」

ほらみる。

ケーキ屋なんてやつてゐるレイの家に、世の全てのイベントは儲け時でしかない。

両手に押し込まれた衣装を手に、レイは自分の部屋へと上がる。階段の途中で漏れてしまつた溜息は、もう何度目だらう。

「幽やん…」

「おひ似合ひじやなご。よかつた」

一階の店に顔を出すと、平然と言つてのけた母親を恨めしげに睨む。

冷蔵庫から出て来た父親も、上から下まで見下すと悪くないなと呟いた。

「魔女つて……色々おかしいだろ」

母親に渡された衣装は、何故か魔女。
安物だと一眼でわかるビニール素材のマントに、とんがり帽子。
靴も、先が尖っている。

銀髪の長いカツラまで付いているのだからやるせない。
男のレイに、この格好は色々と問題がある。

「だつてあなた、女顔なんだもの」

そんな理由で、17歳の息子に魔女コスプレをさせる親がビリヒ
いる。

「カボチャでもいいから、これは嫌だ！」

全部着てしまつたレイが言うのも説得力がない。
ただ、駄目もとで言つておきたかっただけだ。

「駄目。カボチャは母さんがしたいの」

母親の希望なんて聞いていないと言つたかった。

正確には、言おうとした。

ただ、口を開いた瞬間、レイの視界は暗転した。

「魔女様だ！ 魔女様が復活なさつたぞ！！」

「成功だ。召還が成功した！」

石造りの平たい台の上に立っている。
チープな靴の裏からでもその冷たさがよくわかる。
その周りを囮づように老人達が涙を流しながらレイを拝んでいた。

「魔女様、名はなんと？」

レイは、それが自分のことだらうかと疑問に思った。
思つたところで自分の格好を思い出して頭を垂れる。

「……レイ」

レイが名を名乗つただけで、周りの老人達は声をあげて泣いた。
感動しきりの老人達を尻目に、レイの頭は冷えていく。

「聞いたか、みんなの者！ なんと力強く圧倒的なお声だらうか」

そうだ、そうだ、と続く歓声に、レイは銀のかつらを取るタイミングがわからない。

「祝いだ。祝いをもつてこい！――」

一番偉そうな老人が下つ端である「若い者に言いつける。

「偉大な魔女、レイ様。どうぞお納め下さい」

声も手も震えている。

震えでかたかたと鳴る箱をレイがあけると、思わず顔を引きつらせた。

「ケーキ……」

直径21センチ、俗にいう七号サイズのホールケーキがそこにはあつた。

本来なら8~12名程度で食するそれを、一人で食べといつ。生クリームがソフトクリームのように盛られ、様々な果物がくつついでいる。

形も不揃い、色も決して綺麗ではない。

「バランス悪すぎ」

「え？」

レイは受け取りもせず、生クリームの塔の一一番頂きを指ですくつてなめた。

「…………」

「お、お味はいかがでしょうか。国一番のケーキ職人が腕をふるつたのですが」

レイの表情が一向に晴れないからか、聞いてもいないことをべら

べら喋る。

「そいつは誰だ」

鋭く睨むと、献上しにきた若者がびっくりと跳ねる。
老人達がそっぽを向く中、若者は素直に洞窟の奥を見てしまった。
そこには、黄ばんだコックコートを着た20代半ばの女が立っている。

「わ、わたくしで」やれこまか

「ちよつと来い。食え」

レイが手招きすると、ケーキ職人は駆け足で寄ってきた。
レイが若者の腕からホールケーキを奪い、ケーキ職人の方へと差し出す。

「食え」

「はいっー」

緊張でケーキ職人の声が裏返る。

レイと同じように生クリームを指ですくったケーキ職人はそのまま口に運んだ。

「これが何か

「これをケーキと呼ぶなら、この国のケーキは滅べ。クリーム泡立て過ぎ」

「は？」

「混ぜ過ぎたて言えばわかる？ 口当たりが悪いだろ。この生クリームはケーキ向じゃない。脂肪率30～35%程度だろ」

「おひしゃる通りです」

呆然とレイを見るケーキ職人に、溜め息をひとついれます。

「軽いんだよ。45%くらいまで濃さを整えた方がいい」

「はいー。」

「うつかりするな、ベビーフードは固くなりやすい。混ぜすぎるとも駄目だ。こんな風に口当たりが悪くなる。生クリームは直前まで冷やしてあるよな？」

「は……はい、たまには」

「たまにってなんだよ、たまにって。本当お前ケーキ屋やめる。牛にすいませんって頭下げる来い」

レイはこの世界を救うために召還された魔女のはずだった。しかし、ケーキに対して怒っていることに老人達は目を向く。何故ケーキ。
そして牛。

「俺に突っ込まれてるよ！」じゃ、店持つなんて早いんだよ」

ふざけんな、そう言つてレイがとんがり帽子を脱ぎ捨てたと同時に

にかつらが落ちる。

それを見た老人達は、一同に目が点になつた。

「…………誰だ貴様！！」

「お前等が誰だよ！」

額に血管を浮かせて怒る老人達に、レイもすかさず言い返す。
それは至極もつともで、誰も何も言い返せなかつた。

三ヶ月後。

「どうでしょ、レイさま！」

目を輝かせて、あの日出会ったケーキ職人がレイの前にケーキを差し出す。

ただ生クリームを積み上げて、飾り付けとけばいいんだろ、とばかりに果物を盛ったケーキを献上したのが三ヶ月前。ケーキ職人の腕は、見る見るうちに上達した。

今差し出されたケーキには、高く盛られた生クリームはどこにもいない。

ホールの縁になだらかな曲線を描いて存在している。ナパージュで艶を出した木いちばは、まるで宝石のようだ。

「不合格」

「ええ！？」

「中に果物詰め込み過ぎ。今はいいけど時間をおいたら形崩れるぞ。入れればいいってもんじゃない。適量つて言葉を知らないわけじゃないよね？」

「すいません」

「あと、来月は恋人達の祝いがあるって聞いたけど、何するの？」

「え？ ……何もしませんけど」

ケーキ職人が目を丸くして平然と言ってのける。

日本で販売バレンタインにあたる日の日を逃して、こつ儲かるつもりなのか。

他店ではチョコやクッキーのプレゼント包装をしてことこのいのじ、このケーキ職人は、いかに盛るかにかけてこる。レイが田を離すと、すぐに生クリームの塔を建てるのがいい証拠だ。

「一年間の計画表立てて。イベント用には最低でも一週間、期間限定メニューを取り入れること。稼ぎ時だろ？ みすみす手放すには惜しい」

「や、やりますねー！」

何にしようかなと言いながら空中を見て首をかしげる。その頭を、レイが思い切り叩いた。

「お前の脳内で決めるな。紙に書けよー。他の監査団が説明して回るつもりか」

「なるほどー」

「なるほどじゃなー。」

ふざけるな、といつ怒声が響くケーキ屋「銀の魔女」

レイは世界を救う」とはなかったけれど、とあるケーキ屋の未来は救つた。

三ヶ月後。（後書き）

余分なものをそぞろ落とすつて難しそうな……。
といふことで、小野チカでした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9763x/>

ハロウィン企画「銀の魔女」@妄想部

2011年11月1日19時03分発行